

## 枕草子 第十回

## その八の四 たまたまくつろいでいた時に

たまたまくつろいでいた時に、誰かが、大進さまが急いでお話ししたいことがあるそうです、と私に伝えに来たのを、中宮さまがお聞きになられて、おやまあ、またどんなことを言つてあなたに笑われようというのでしょうか、とおっしゃられたのがとても可笑しかつた。

それでも中宮さまが、行つて聞いていらつしやい、とおっしゃられたので、わざわざ出向いて行きました。

すると生昌さまは、例の口調で、このまえの門の一件のことだけどね、その話を兄の中納言さまにしたんだけど、たいそう感心しなさつて、なんとか、よい折り、その方の心が穏やかな時に、静かにお話をしたいものだなど、申されておりました、と言う。

話はそれだけで、それ以外には、特に話など無い様子。もしかしたら、夜に部屋にやつてきた時の話かなと、ちょっとドキドキしてもいたのに、そんなことはなくて、こんどまた静かにお話をするために、お部屋におうかがいします。と言つただけで行つてしまつた。

戻つてくると中宮さまが、ねえ、どんなことでした、とおっしゃられたので、そのままお伝えいたしました。

側にいた人たちは、わざわざ急いでおこし下さいと言つて人を呼んでおきながら、そんなことでしたら、わざわざ呼びつけたりなどしなくてもすむ話じやありませんか。何も改まつてお呼びだてなどせず、何かの折りに部屋の隅の方で何気なくとか、そうでなくとも、あなたがお部屋でくつろいでいる時にやつてきて言えばそれで済むことじやありませんか、と生昌さまを馬鹿にした。

すると、中宮さまは、そうじやありませんよ。生昌さまは自分が兄上の中納言さまのことをたいそう尊敬なさつていらつしやいますから、その方があなたを褒めたのが嬉しくて、わざわざそのことを、急いでお伝えしようとなさつたのですよ、とおっしゃられたのは、ほんとうにお優しくて素敵なことでした。